

○令和6年度海外派遣研修

「ソフトテニスに関するスポーツ科学の学術的発展を目指した国際交流」

人間科学センター 教授 井田 博史

○期 間 令和6年9月3日～9月6日（4日間）

○研修先 韓国, 安城市, 安城国際ソフトテニス競技場

1. 研修の目的

ソフトテニスは、国内では学校部活動や体育授業種目として広く普及している。一方、国外でも主にアジア地域を中心にプレーされ、現在国際ソフトテニス連盟（ISTF）には65の国と地域が加盟する。しかしながらソフトテニスを対象としたスポーツ科学研究については、テニス（硬式）やサッカーなど世界的に普及している競技と比べて、実数が極めて少ないのが実情である。そのなかで、申請者ら研究者有志は学術団体・日本ソフトテニス研究会（Japanese Society of Science in Soft Tennis: JSSST）を立ち上げた。研究会大会については2018年以降毎年開催し、また2020年からは機関誌「ソフトテニス研究」を年1回のペースで発行している。一方、これまでソフトテニスに関する国際的な学術交流は決して盛んとはいえ、同研究会運営委員のなかで課題と考えてきた。

議論を進めるなかで、今年度韓国安城市で開催された第17回ソフトテニス世界選手権大会の会期に合わせて、将来に向けたソフトテニスに関する国際的な学術的連携を協議するための会合を開催するよう、韓国ソフトテニス連盟に提案することとなった。日本ソフトテニス研究会運営委員の朴相俊氏（佐久大学）が中心となって調整を進め、研究会合（Joint Symposium between Korean Soft Tennis Association (KSTA) and Japanese Society of Science in Soft Tennis (JSSST): 韓国ソフトテニス連盟と日本ソフトテニス研究会の合同シンポジウム、以下日韓合同ソフトテニスシンポジウム）を開催することが決定した。本海外派遣研修の目的は、申請者が日本ソフトテニス研究会会長としてこの日韓合同ソフトテニスシンポジウムに参加し、韓国ソフトテニス連盟関係者と学術交流を図ることとした。

2. 研修の概要

2-1. 日程

| | 日韓合同ソフトテニスシンポジウム | 世界選手権大会 |
|-----------|---|-------------------------|
| 2024年9月4日 | 【韓国ソフトテニス指導者との学術交流】 ・日本ソフトテニス研究会活動紹介 ・オンコート実技セミナー | 男女シングルス(1日目) |
| 2024年9月5日 | 【世界選手権大会の視察・情報交換】 ・男女シングルス ・アンチ・ドーピング活動 | 男女シングルス(2日目:決勝日) 表彰式 |

2-2. 参加者

【日本ソフトテニス研究会運営委員】

井田博史(茨城県立医療大学), 高橋憲司(日本医科大学), 朴相俊(佐久大学), 小峯秋二(北翔大学), 田中俊充(ソフトテニスホームページ), 楠堀誠司(県立広島大学)

なお、その他の運営委員として川上晃司(天理大学), 篠原秀典(日本体育大学), 緒方貴浩(帝京大学), 高橋和孝(日本女子大学)も日本代表チーム選手団スタッフとして現地におり、適宜情報共有を行なった。

【韓国ソフトテニス連盟関係者】

韓国のソフトテニス指導者など約10名

2-3. シンポジウム内容

【韓国ソフトテニス指導者との学術交流】

・日本ソフトテニス研究会活動紹介

日本ソフトテニス研究会の概要について、機関誌「ソフトテニス研究」、研究会大会プログラム、日本ソフトテニス連盟の公認指導教本などを紹介しながら、申請者が説明を行なった。また、2023年に国際学術誌International Journal of Racket Sports Scienceに掲載された、ソフトテニス国際競技大会におけるメダル獲得因子について調べた学術論文の内容について、責任執筆者である楠堀氏が解説した(図1)。また、日本ソフトテニス連盟公認指導教本の改訂にあたって、ラケットの握り方(グリップ)について執筆にあたった田中氏が、名称の定義と使用法について説明した。通訳は朴氏が務めた。

・オンコート実技セミナー

ネットプレーヤーの打球技術に関して、特に日本と韓国のボレー技法の違いに着目し、それらをハイブリッドさせた新たな技法の提案が、朴氏と小峯氏よりなされた(図2)。さらに、ソフトテニスパフォーマンスの科学的分析手法の事例として、高橋憲氏によりスピードガンを用いた打球速度測定の実演が行われた(図3)。

【世界選手権大会の視察・情報交換】

派遣期間中に開催された男女シングルスについて、決勝戦まで観戦した。また、アンチ・ドーピング活動の実際について韓国ソフトテニス連盟関係者および日本代表チーム選手団スタッフと意見交換を行なった。他の日本ソフトテニス研究会運営委員は、申請者の帰国後も大会を視察・観戦した。

なお、本大会の国別対抗には男子25ヶ国、女子23ヶ国が参加し、日本勢は男子が優勝(3連覇)、女子は準優勝であった。また、男子シングルスでは上松俊貴選手が同種目日本人初となる優勝を果たした。

3. まとめ

今回の日韓合同ソフトテニスシンポジウムは、日本ソフトテニス研究会として初めての試みであった。まだ学術集会のような体裁とはなっていないが、今後は他の参加国にも呼びかけるなどして国際学会大会化を目指した活動へと進めていきたい。来年度9月には、同じく韓国にある聞慶市で第9回アジア選手権大会が開催される予定であり、より充実した国際学術交流を図る企画を提案したいと考えている。



図1 日本ソフトテニス研究会活動紹介



図2 オンコート実技セミナー



図3 打球速度測定の実演